



# 貫珠の音 : 万葉集と平安朝漢詩と白氏文集における

丹羽, 博之

---

**(Citation)**

国文学研究ノート, 24:1-9

**(Issue Date)**

1990-04

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCOI)**

<https://doi.org/10.24546/81012276>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012276>



# 貫珠の音

——万葉集と平安朝漢詩と白氏文集における——

丹羽博之

## 一、万葉集の貫珠

卯の花の匂ふ垣根に

ほととぎすはやも来鳴きて

忍び音もらす夏は来ぬ

今も、初夏になると思い出すメロディである。初夏の訪れを告げるほととぎすは古来多くの詩歌に詠まれてきた。就中、万葉人に愛され、集中、実に一五四首も詠まれている。鳥の中では最も多く、二位の鶯の四五首との差からも、如何に万葉人に賞翫されたかが窺い知れよう。集中のほととぎすの詠の中で以前から、腑に落ちない表現があった。多くの注釈書類にあたっては私にとっては満足のいくものではなかった。その表現というの

藤原夫人の歌一首。明日香清御原宮に天の下治めたまふ  
天皇の夫人なり。字を大原大刀自といふ。即ち新田部皇  
子の母なり

1465

ほととぎすいたくな鳴きそ汝が声をさ月の玉にあへ貫くま  
でに

藤原夫人歌一首。明日香清御原宮御宇天皇之夫人也。字  
大原大刀自。即新田部皇子之母也。

霍公鳥通莫鳴汝音乎五月玉相貫左右二

（本文、訓み、歌番号は日本古典文学全集『万葉集』に  
よる。以下、万葉集は全て同書による。）

の歌に見られる。ほととぎすの美声を五月の玉にあへ貫くとい  
うものである。本稿では、この歌声を玉に貫くという表現の源  
泉を中心に考察を加えたい。

この藤原夫人の歌に対して『万葉代匠記』では、

五月の玉。薬玉のことなり。風俗通。五月五日以五彩絲繫  
臂者辟鬼及兵。一名長命縷。一名統命縷。いたくななきそ  
とは、郭公は五月を賞する物なれば、それまては鳴ふるす

な。薬玉に汝か声をもぬきましへむとなり。ほととぎすの  
声はぬきましへらるる物にあらぬと、賞翫のあまりに、さ  
るはかなきことをも詠むが歌の習なり。

と注する。ほととぎすの美声が玉を貫くという非現実的な表現  
に対して「ほととぎすの声はぬきましへらるる物にあらぬと、  
賞翫のあまりに、さるはかなきことをも詠が歌の習なり」と、  
やや苦しい注を付している。

小学館日本古典文学全集『万葉集』のこの歌の頭注は

あへ貫くまでにアアへはアハセの意。ほととぎすの声を五  
月の声に交えることは一九三九にも見える。四月中にほと  
とぎすの声をきいて詠んだのであろう。

とある。この他、多くの注釈書もほととぎすの美声が玉を貫く  
という表現に対して格別の言及はない。

このほととぎすの美声が玉を貫くという表現の例は、万葉集  
中に他に五例見られる。以下、その例を挙げる。

1939 ほととぎす汝が初声は我にもが五月の玉に交えて貫かむ  
霍公鳥 汝始音者 於吾欲得 五月之珠尔交而

将賁 (卷十、夏雑歌)

京に入ること漸く近づき、悲情撥ひ難くして、懐を

4006

述ぶる一首 并せて一絶

かき数ふ 一上山に 神さびて 立てるつがの木 本も枝  
も 同じ常磐に はしきよし 我が背の君を 朝去らず  
逢ひて言問ひ 夕されば 手携はりて 射水川 清き  
河内に 出で立ちて 我が立ち見れば あゆの風 いた  
くし吹けば 湊には 白波高み 妻呼ぶと 渚鳥は騒く  
葦刈ると 海人の小舟は 入江漕ぐ 梶の音高し そ  
こをしも あやにともしみ しのひつつ 遊ぶ盛りを 天皇  
の 食す国なれば 命持ち 立ち別れなば 後れたる  
君はあれども 玉梓の 道行く我は 白雲の たなびく  
山を 岩根踏み 越え隔りなば 恋しけく 日の長けむ  
そ そこ思へば 心し痛し ほととぎす 声にあへ貫く  
玉にもが 手に巻き持ちて 朝夕に 見つ行かむを  
置きて行かば惜し

4007

我が背子は 玉にもがもな ほととぎす 声にあへ貫き  
手に巻きて行かむ

右、大伴宿禰家持、椽大伴宿禰池主に贈る。 四

月三十日

私我勢故波 多麻尔母我毛奈 保登等伎須 許惠  
尔安倍奴吉 手尔麻伎弓由可牟

右、大伴宿禰家持贈椽大伴宿禰池主。 四月廿  
日

四月三日に、越前判官掾大伴宿禰池主に贈る。霍公鳥の歌、感旧の意に勝へずして懷を述ぶる一首 并せて短歌

我が背子と 手携はりて 明け来れば 出で立ち向かひ  
夕されば 振り放け見つつ 思ひ延べ 見和ぎし山に  
八つ峰には 霞たなびき 谷辺には 椿花咲き うら悲  
し 春し過ぐれば ほととぎす いやしき鳴きぬ ひと  
りのみ 聞けばさふしも 君と我と 隔てて恋ふる 磯波山  
飛び越え行きて 明け立たば 松のさ枝に 夕さらば  
月に向かひて あやめぐさ 玉貫くまでに 鳴きとよ  
め 安眠寝しめず 君を悩ませ

水鳥を越前判官大伴宿禰池主に贈る歌一首 并せて短歌

天離る 鄙にしあれば そここも 同じ心そ 家離り  
年の経ぬれば うつせみは 物思繁し そこ故に 心  
なぐさに ほととぎす 鳴く初声を 橋の 玉にあへ貫  
き かづらきて 遊ばむはしも ますらをを 伴なへ立  
てて 叔羅川 なづさひ上り 平瀬には 小網さし渡し  
速き瀬に 鶺鴒を潜けつつ 月に日に 然し遊ばね 愛  
しき我が背子

以上が、万葉集中に見えるほととぎすの美声が玉を貫くの例である。六例中藤原夫人の作が一例、作者未詳の作一例に対し大伴家持が四首と異常な多さを示す。これらの、ほととぎす

の美声が玉を貫くの表現に対して、何故、そうした非現実的な表現が成立したのかについて言及した注は見当らないように思われる。

ところが『白氏文集』を読んでいるときに、ふと貫珠という漢語の存在を知った。以下、貫珠なる語の出典、意味、用例を検討していく。

そもそも貫珠なる語は、『礼記』『楽記』に基づく語で、

故歌者、上如<sub>レ</sub>抗、下如<sub>レ</sub>隊、曲如<sub>レ</sub>折、止如<sub>レ</sub>藥木、倨中<sub>レ</sub>矩、句中<sub>レ</sub>鉤、纍纍乎端如<sub>レ</sub>貫珠。

故に歌は、上るときは抗るが如く、下るときは隊つるが如く、曲るときは折るるが如く、止るときは藥木の如く、倨は矩に中り、句は鉤に中り、纍纍乎として端しきこと貫珠の如し。

と見える。この語は、万葉人が使用した類書『北堂書鈔』（卷一百六 楽部二 歌篇二）にも

上如抗下如墜倨中矩句中鉤

楽記云樂者上如<sub>レ</sub>抗下如<sub>レ</sub>隊曲如<sub>レ</sub>折止如<sub>レ</sub>藥木 倨中<sub>レ</sub>矩句中<sub>レ</sub>鉤纍纍乎端如<sub>レ</sub>貫珠。

と見える。この部分の解釈は、

大きく屈折するときは緩慢であり、また音が長ながと続い

て、しかも明瞭であるときは、あたかも多くの珠を一筋に貫いているように感ぜられる。

(新訳漢文体系『礼記』)

とあるのが妥当であろう。美しい歌声の響きはあたかもいくつかの珠を貫くかのように聞える、の意であろう。

この貫珠なる語の辞書的な意味は

「貫珠」①珠をつらぬいて、緒を通す。じゅずつなぎ。順に

美正なものに感化していくことのたとえ。「礼記、

楽記」樂樂平乎、端端如貫貫珠。「疏」言聲ト之状、樂樂

乎、感感動動人、心心端正、其其状如貫貫於珠。言ト聲

音感動動於人、令令人心想形状如如此。

②緒を通して、つらぬいた珠。「易緯坤靈図」至徳

之世、五星如貫貫珠。

③じゅずをいう。念珠。「玉泉子」手持貫貫珠、閉閉

目以誦經經。

(『広漢和辞典』)

とだけしか説明されていないものもあるが

音声の美妙なことのたとえ。

(『新字源』)

と正しく貫珠の意味をとらえているものもある。また、中国で出版された『辞海』にも

貫珠 成串的珠子。常用以形容圓潤的歌声。《礼記》：「故歌者上如抗，下如隊（墜）……乎端貫珠 孔穎疏：「言聲之状」乎感動人心。」

とある。

この貫珠なる語の用例を求めてみると、六朝詩には、ほとんどその例を見ないが、唐代になると

貫珠一倡 貫珠の一倡

擊石丸成 石を擊ちて丸成る

(郊廟歌辭 周宗廟 樂舞辭・成順)

懸泉珠貫下 懸泉 珠貫下り

列帳錦屏舒 列張 錦屏舒ぶ

(初唐張說「扈從幸韋嗣立山莊扈制」)

等の例を見る。ところが、六朝詩には、私の調査した範囲では他の例を見つけない。だが、『礼記』にも見え、『北堂書鈔』にも引かれていることから万葉人の目に止まる可能性は十分あったと考えられる。万葉集の貫珠の六例の用例中四例までが家持の詠であり、家持の好んだ表現といえよう。しかも、全て越中守時代に詠まれている。越中守時代の家持は文学意識の高揚した時期でもあり、大伴池主との漢詩文による贈答も収められており、漢詩文の影響を強く受けた時期でもあった。

そうした時期の家持の詠であるので、彼の賞翫したほととぎすの鳴き声を漢語の貫珠を下敷きにして、新たな表現を試みたのではないか。しかも、この新たな試みは、家持の好みに

かない、短期間に連続して四例も詠まれている。

次に万葉集のほととぎすの声を玉に貫くという表現の最初の例かと思われる藤原夫人の歌について考えてみる。藤原夫人の歌は万葉集中にもう一例有る。それは夫天武帝から

天皇、藤原夫人に賜ふ御歌一首

103 我が里に大雪降り大原の古りにし里に降らまくは後

(巻二)

と詠みかけられたのに対して

藤原の夫人の和へ奉る歌一首

104 我が国の霧に言ひて降らしめし雪の摧けしそこに散りけ

む (同)

と返歌したものである。夫天武帝のからかいにみごとに答えた当意即妙の歌才の持ち主である。このような歌才の持ち主であれば、ほととぎすの美声が珠を貫くという表現も漢語の貫珠に拠る表現であった可能性もあろう。家持の詠作群と藤原夫人の作及び前に挙げた作者未詳の詠との影響関係については不明である。

一方、このほととぎすの美声が橋の珠を貫く、という発想、表現は当時の端午の節句の風習とも関わるものであろう。ほととぎすと橋の取り合せは

大伴書持の歌二首

1481 我がやどの花橋に ほととぎす 今こそ鳴かめ 友に逢

へる時

大伴家持、霍公鳥の晩く喧くを恨むる歌二首

1486 我がやどの花橋を ほととぎす 来鳴かず地に 散ら

してむとか

等とあり、初夏の訪れの素材として二者が一首の中に詠まれている。また、橋の珠に貫く、あやめ草の珠に貫く、という表現も

大伴家持の橋の歌一首

1478 我がやどの花橋の いつしかも 玉に貫くべく その実

なりなむ

(巻八・夏雑歌)

大伴家持、橋の花を惜しむ歌一首

1489 我がやどの花橋は 散り過ぎて 玉に貫くべく 実に

なりにけり

(同)

大伴家持の霍公鳥の歌一首

1490 ほととぎす 待てど来鳴かず あやめぐさ 玉に貫く日

を いまだ遠みか

(同)

など例を見、ここに「ほととぎす―花橋」「珠に貫く」から「ほととぎすの声を橋、あやめ草の珠に貫く」の連想が働いた可能性もある。

このほか、白露の珠に貫くという

1547 藤原朝臣八束の歌一首

さ雄鹿の 萩に貫き置ける 露の白玉 あふさわに 誰

の人かも 手に巻かむちふ (巻八・秋雑歌)

1572 大伴家持の白露の歌一首  
我がやどの 尾花が上の 白露を 消たずて玉に 貫く  
ものにもが

(巻八・秋雑歌)

等視覚的な歌もあり、「白露の珠に貫く」から「ほととぎすの美しい声が珠に貫く」という表現が生まれたものとも考えられる。これらの視覚的表現は、平安朝和歌の

文屋朝康

白露に風のふきしく秋の野は貫きとめぬ玉ぞちりける

(『後撰集』巻六 秋中)

に詠み継がれていくものであろう。

しかし、今問題にしている「ほととぎすの美声が橋の玉の緒に貫く」との関係で考えてみた場合、一方は視覚的な詠であるのに対して、他方は聴覚的印象を詠んでおり、両者を直接強く結びつけるのはためらいを覚える。「ほととぎすの鳴き声が珠の緒に貫く」という表現は先に示した初夏の景物としての取り合せや、端午の節句の風習からの「ほととぎす―橋、あやめ草の珠の緒に貫く」及び、「白露の珠を貫く」という表現層に加えて、前掲の漢語、貫珠をも強く意識して、新しく詠まれた表現といえよう。

## 二、平安朝漢詩及び白詩の貫珠

貫珠の語は平安朝漢詩文に再び登場する。所謂、国風暗黒と

呼ばれる時代に成立した勅撰三漢詩集にはその例を認め得ないが、平安朝中期になると以下に示す如く、おびただしく用いられる。

長歌惜春暮

村上御製

動塵響恨韶光尽 動塵の響は恨む韶光の尽くることを

貫玉声愁夜漏繁 貫玉の声は愁ふ夜漏の繁きを

秋月高低朗

源為憲

繫帛塞鴻雲表翅 繫帛の塞鴻雲表の翅

貫珠阜鶴霞間声 貫珠の阜鶴霞間の声

弦歌伴月来

源為憲

晝潔自迎彈雪曲 晝潔自ら迎ふ彈雪の曲

霽瑩新得貫珠声 霽瑩新たに得たり貫珠の声

(『類聚句題抄』本文は『統群書類従』に拠る。)

花鳥春資貯

左金吾(藤原公任)

裁錦惜將風底色 裁錦惜しむに風底の色將てし

貫珠銜得月前音 貫珠銜むに月前の音を得たり

(『本朝麗藻』本文は『新校群書類従』に拠る。)

傀儡子孫君

旅舶逢君涙不窮 旅舶君に逢ひて涙窮らず

貫珠歌曲正玲瓏 貫珠の歌曲正に玲瓏たり

翠蛾眉細羅衣外 翠蛾の眉は細し羅衣の外

紅玉膚肥錦袖中 紅玉の膚は肥ゆ錦袖の中

(『江吏部集』本文は『新校群書類従』に拠る。)

このように十世紀中頃より、貫珠の語は急速に詠まれ始める。

平安中期になってこの貫珠の語が頻に詠まれた理由を考えたとき、やはり、まず、想起されるのは、先にも少し触れた白詩の影響である。『白氏文集』をひもとくと

九燭臺前十二妹。

主人留醉任歡娛。

翩翻舞袖雙飛蝶。

宛轉歌聲一索珠。

坐久欲醒還酩酊。

夜深初散又踟躕。

南山賓客東山妓。

此會人間曾有無。

夜宴醉後留獻裴侍中

〔卷六十五〕

（『白氏文集』の本文は、全て、四部叢刊に影印された那波道円活字本に拠る）

の例を見る。ここでは酒宴での妙なる歌聲はあたかも珠を貫く一筋のいとと貫珠の語をしたじきにして表現されている。この二句は十世紀になった大江維時撰の『千載佳句』（下巻 宴喜部「歌舞」）にも収められており、平安人の人口に広く膾炙していたと考えられる。このほか、『白氏文集』には、私が検索しただけでも、四例もの貫珠の例を見る。以下に、その例を示すと

有時婉軟無筋骨。

有時頓挫生稜節。

急聲圓轉促不斷。

鞞鞞麟似珠貫。

小童薛陽陶吹鶯栗歌 和浙西李大夫作。

〔後集卷二〕

歌聲凝貫珠。舞袖飄亂麻。

相公謂四座。今日非自誇。

有奴善吹笙。有婢彈琵琶。

十指纖若笋。雙鬢鬢如鴉。

和<sub>レ</sub>新樓北園偶集。從<sub>レ</sub>孫公度周巡官韓秀才盧秀才范處士小飲。鄭侍御判官周劉二從事皆先歸。

〔後集卷二〕

擬作雲泥別。猶思頃刻陪。

歌停珠貫斷。飲罷玉峰頽。居易

宴興化池亭。送白二十二東歸聯句 〔後集卷二十〕

堂東有瀑布、水懸三尺。瀉階隅、落石渠。昏曉如練色、夜中如環珮琴築聲。堂西倚北崖、右趾、以剖竹架空、引崖上泉、脈分綫懸、自簷注砌。曇曇如貫珠、霏微如雨露。

（「草堂記」）

このように、白楽天は、貫珠の語を好んでしばしば使用したことが窺われる。『文選』『玉台新詠』『李白』『杜甫』『柳宗元』『王維』などの六朝、唐代の代表的な詩人の詩には、貫珠の語の使用例は未見である。また、最近陸統と出版されている松浦崇氏編『全三国詩索引』などの六朝詩の索引類にも貫珠

の語は見られない。このほか、『佩文韻府』には数例見られるが、いずれも白楽天よりは後の時代のものである。

比して、『白氏文集』には五例と際立って多いということから、この貫珠の語は白楽天が特に好んだ語であり、小島憲之先生が述べられた、白詩語と呼べる語であろう。そうした白詩の傾向が前掲の平安朝の漢詩にも敏感に受容されたものであろう。

これ以外に検出しえた貫珠の例は

察乎靡靡似浮絲以為緒 察するに靡靡として浮絲以て緒を為すに似

聽乎纍纍若貫珠之為隧 聴くに纍纍として貫珠の隧を為す

が如し

(「歌賦屏文」 門伯瓊『文苑英華』卷七十八 樂・八)

声欲断而復続 声欲断たんと欲して復た続く

若貫珠之纍纍 貫珠の纍纍たるが若し

(「歌響遏行雲賦」 『文苑英華』同)

などがあり、更に『文苑英華』(卷七十八)には「善歌如貫珠 賦 以声氣円直有如貫珠為韻。」の題のもとに、劉隲、趙藩、元稹の賦が収められており、唐代においては、賦にはしばしば見られる。元稹の例などは、白楽天からの影響も考えられよう。

この他にも

連壁座中斜日滿 連壁の座中 斜日滿ち

貫珠歌裏落花頻 貫珠の歌裏 落花頻りなり

(中唐 段成式「和徐商賀盧外員賜餅」)

などの例を見るが白詩に比べると僅かである。

## 結語

以上の考察をまとめる。

一、万葉の貫珠は漢籍からの影響でいえば『礼記』『北堂書鈔』によるものであろう。

ただし、端午の節句の風習や、白玉の緒に貫く表現層とも結合したものであろう。特に、家持の好みにかない、短期間に四首も詠まれている。

一、貫珠の語を白楽天は好んで使用しているのに対して、他の中国の詩人達はあまり用いておらず、平安朝の漢詩の貫珠は『白氏文集』からの摂取と考えられる。白詩の影響の顕著であった平安朝中期の漢詩にしばしば見られる。

一、奈良朝、平安朝の二度にわたり、時代、作者、出典を異にして摂取された珍しい例である。

一、中国の漢詩の場合は「歌」(人が歌うもの。楽器の調べは含まない。)や泉(滝)の音に対して貫珠と表現された。

一方日本の漢詩の場合は、時鳥、鶴の美しい鳴き声や琴等の楽器にも用いられた。中国の漢詩の場合は『礼記』の「歌」を忠実に守っているのたいして、日本の漢詩の場合には強く拘束されず、自由に詠まれている。

一、貫珠の語は日本人の感覚、情趣にはあまり適さず、以後はそれほど詠まれていないようである。

\* 本稿は平成元年度和漢比較文学会西部例会（四月十五日於甲南大学）に於て、口答発表したものに基づく。席上、御質問、御教示頂いた、浜口博章先生、新間一美先生に厚く御礼申し上げます。

\* 本稿は平成元年度文部省科学研究補助金（総合研究（A）「平安朝前期漢文学の総合的研究」）及び昭和六十三年度文部省科学研究補助金（奨励研究（A）「平安朝和歌における漢詩文受容とその変遷」）の研究成果の一部である。

（にわ ひろゆき）